〈研究ノート〉

北海道武蔵女子短期大学と米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校が実施した遠隔合同授業の報告

── パンデミックから生まれた新形態の外国語授業 ──

Report on Remote Collaborative Learning at Hokkaido Musashi Women's Junior College and The University of North Carolina at Chapel Hill

── A New Style of Foreign Language Learning Class Emerged from the Pandemic ──

板　谷　初　子　　荒　竹　由　紀
Hatsuko ITAYA　　Yuki ARATAKE

Abstract:

This paper is the first report on the joint collaborative classes that were planned and conducted by a faculty member at Hokkaido Musashi Women's Junior College and a faculty member at the University of North Carolina at Chapel Hill engaging in innovative collaborate teaching practices. These joint classes were held five times in the Fall of 2022. The

purpose of this paper is to make an initial assessment of accomplishments and areas for improvement and to use this assessment to shape future iterations of the program. Both classes gave their students a similar questionnaire at the end of this collaborative program and used this data to make adjustments to the teaching model throughout the Fall semester. This report includes an analysis and assessment of the classes and their impact on students, along with, a comparative analysis of the varying questionnaire results of the Japanese and American students. It also reflects on the ways in which the information and qualitative data collected will contribute to future innovations in pedagogical design. Since this project will continue in future semesters, there will be ongoing assessment of the impact of these classes on the students' knowledge and performance along with their perception of the value of these learning opportunities. This paper concludes, based on questionnaire results and instructor assessments that the classes succeeded in engaging students in a meaningful and enjoyable collaborative learning process. Both the Japanese and the American students responded in a remarkably positive way about their experiences. Based on our assessment, we think that continuing this collaborative work is of considerable value both as an experiment in collaborative learning and as a bridge to future innovations with this teaching format.

1．はじめに

本稿は、2022 年度の後期に、北海道武蔵女子短期大学（以下武蔵）英文学科 2 年生対象の板谷専門ゼミナールと、アメリカのノースカロライナ大学チャペルヒル校（The University of North Carolina at Chapel Hill 以下 UNC）の、日本語を少なくとも 3 年間学習した学生対象の日本語ク

ラスで実施された合同授業の、第一次報告である。本合同授業は、9月下旬から11月中旬まで5回行われ、さらに1月にも実施されることが予定されている。そのため、本稿の目的は合同授業の完成形を報告するものではなく、現在進行中の試みを速報として記録し、今後の改善に向けて活用することである。

UNCは、2022年度7月に同大学の日本語授業担当教員を武蔵視察に派遣した。またUNCからは2023年のみならず、2024年度の合同授業実施の意向も表明されている。筆者らは、本合同授業に対するこのような大学からの期待にも応えるべく、今後改善を重ねながら、両大学の学生にとって実りの多い授業を作り上げていきたい考え、本第一次報告を執筆することとする。

2．合同授業のアイディアが生まれた背景

外国語を勉強する動機付けの第1の条件は“Availability of elaborate and vivid future self-image”「詳細で生き生きとした将来の自己イメージが描けるかどうか」(Dörnyei, 2009) であり、自分が英語を使ってコミュニケーションをする場面を具体的にイメージすることができなければ、高い学習意欲を長期に継続することは困難であるとされている。しかし札幌での学生生活においては、アルバイト先で外国人観光客に接客をする程度の簡単なやりとりを除けば、英語でなんらかのテーマについて議論をする機会は少ない。留学の機会があれば、毎日英語を話す自己イメージを描けるが、日本人が留学を断念する第1の理由が「経済的な問題」であるという調査結果が示すとおり（鈴木　2017)、武蔵でも費用を払えないことを理由に、短期留学や海外語学研修を諦めざるを得ない学生が見受けられる。

このような「英語を使う機会がないため学習意欲が継続できない」という状況に追い打ちをかけたのが、コロナ禍での行動制限であった。経

済的に留学や語学研修が可能であった学生さえもが、その機会を奪われた。また、武蔵の英文学科には、航空業界への就職を目指し英語学習に励む学生も多くいるが、航空業界の採用中止が相次ぎ（朝日新聞朝刊 2020 年 7 月 21 日）、外国語学習のモチベーションを維持することはさらに困難となった。筆者は、コロナ禍でも学生が自発的に「英語を勉強したい」と思える環境を作ることが、学習効果を上げる有効な方法の一つであると考え、日本語を学ぶ外国人学生との合同授業を行うというアイディアを思いついた。筆者は 2023 年度の専門ゼミナールからこの合同授業を行うことを目指し、2022 年の 3 月から協力大学を探し始めた。複数の国の複数の大学を対象として協力者を探していたところ、UNC で日本語を教える教授（共著者）から本授業案に賛同を得ることができた。UNC では大学（Office of the Vice Provost for Global Affairs の Collaborative Online International Learning 部門）が、日本の協力大学を探そうとしていたタイミングであったため、両者のニーズが一致した形となった。

3．遠隔授業から期待される利点

合同授業からはいくつかの利点が期待される。まず、日本人が留学を断念する主要要因とされている「費用」と「語学力に対する不安感」の問題（小林　2011）を軽減できることが挙げられる。合同授業で学生の経済的負担が増えることはない。また、語学力に対する不安についても、留学であれば自分一人で英語を使う場面が多いと推測されるが、遠隔授業であれば、その場に教員と他のゼミ生がいるため、不安感は軽減されるであろう。また、合同授業でパートナー大学の学生は日本語を学んでいるため、日本語を話すことで自分が役に立っているという誇りも感じられるはずである。さらに、母語を教えることから得られる気づきは、翻って自らの語学学習に有益となり得るであろう。

学生は通常の授業でネイティブ・スピーカーの講義を受ける機会があるが、合同授業は、それとは違う学習経験を学生に提供できると考える。その理由として第一に挙げられるのは、交流相手が同年代であり、かつ、自分を評価する立場にないということである。大学生を対象にしたある調査では、対人距離は社会的地位を持つ者に対して遠ざける傾向があり、特に中年の男性に対してはその傾向が顕著である（池上・喜多　2007）。自分を評価する立場になく、かつ、共通の話題が多い同年代の学生との交流は、親近感がわき、学習意欲が高まると推察される。

合同授業の魅力としてもう一つ考えられるのは、交流相手が日本国外に住んでいるということである。日本在住のネイティブ・スピーカーの講師の多くは、日本文化と日本語を理解し、日本人の発音の癖にも慣れている。そのため、本来であれば通じない可能性のある発音や表現でも、理解されることがある。また、日本在住の講師は、学生が理解できる語彙、スピード、発音で話す傾向がある。このように、日本在住の外国人講師とのやりとりは、海外在住の学生とのやりとりと比較すると、真実味つまり「真正性」（authenticity）（Widdowson, 1978）が低いと言えるであろう。「真正性」に関しては、様々な側面からの議論があり詳細な議論は別の機会に譲るが、一般的には「真正性」が高いほど学習意欲が高まるとされている。

新型コロナウイルスの感染拡大で、人々の生活は一変した。一時期全国の大学は遠隔授業が中心となり、日本の学生たちは対面授業を切望した。ところが、ある程度対面授業が再開された後は、多くの学生が遠隔授業を望むようになったという調査結果がある（中村　2022）。このことから、遠隔授業は今や学生のニーズに合致している教育法の一つとも言える。コロナ禍で失ったものは多くあるが、海外の大学との遠隔合同授業（以下合同授業）というアイディアは、おそらくパンデミックがなければ生まれなかったであろう。

4．遠隔合同授業の詳細

4.1　開始予定の前倒し

2023 年度 4 月の開始を目指して協力大学を探していたが、アメリカでは秋に新年度が開始となるため、それに合わせて 2022 年の秋から合同授業を開始することとなった。専門ゼミナールの学生に、ゼミのテーマを変更することについて意見を求めた結果、全員一致で「是非アメリカの学生と授業を行いたい」という希望であった。板谷専門ゼミナールはもともと英語を聞く・話すことを中心に行っていたゼミであるため、学生はアメリカ人学生との交流を楽しみにしている様子であった。

4.2　UNC 教員による板谷専門ゼミナール視察

2022 年 7 月 7 日に、UNC の日本語教員である荒竹による板谷ゼミナール視察が行われた。ゼミ生は英語で武蔵の校舎や施設を案内し、教室では PPT を用いながら、武蔵の教育や特徴について英語プレゼンテーションを行った。その後に、合同授業で取り上げたいテーマについて全員で話し合った。学生はホワイトボードにウエルカムメッセージを書くなどして、荒竹教授を歓迎した（図 1）。

パートナー校を訪れ、その大学の雰囲気を直に感じ、学生の英語力や興味関心を理解できたことは、双方の学生たちに合った授業プログラムを組み立てる上で大いに参考となった。そのため、武蔵からも UNC への視察を近い将来実現し、より学生のニーズに合致した授業プランを提案したいと希望している。

4.3　遠隔合同授業の内容

合同授業は、武蔵の学生 11 人と UNC の学生 8 人（男子 3 人・女子 5 人）で、Zoom で行われた。時差があるため、日本時間の午前 9 時、ノースカロライナ州の午後 8 時（サマータイム終了後の 11 月以降は午後 7

図１　UNC 教員による武蔵視察の様子

表１　遠隔合同授業の日程と各回のテーマ

	日時	テーマ
1	9 月 30 日	自己紹介・学校紹介
2	10 月 14 日	ゴミ問題
3	10 月 28 日	女性の社会進出
4	11 月 11 日	大麻・ドラッグ
5	11 月 18 日	同性婚

時）に合同授業を行った。本来は月曜日の４講目に行う専門ゼミを、合同授業の５回に限り、金曜日の１講目に移動した。表１は合同授業の日程とテーマ、また表２は授業の流れを示している。テーマは社会問題を中心に、日米双方の学生たちが決定した。１回の合同授業時間は 60 分であるが、板谷専門ゼミはその後の 30 分でその日の振り返りを行ったため、トータルの授業時間は 90 分であった。UNC の授業は通常１回が

表２　遠隔合同授業の流れ

1	・司会が今日の授業の流れを説明	３分
2	・日本人学生２人（A & B）が英語でテーマについてプレゼンテーション（６分） ・アメリカ人学生２人（C & D）が日本語でテーマについてプレゼンテーション（６分）	12 分
3	・A、B、C、D をリーダーとして、４つのブレイクアウトセッション（各部屋５人程度） ・テーマについて、リーダーが司会をしながらディスカッション（８分 x2 言語） ・ディスカッションが終わったら、自主的にブレイクアウトルームから出る	16 分
4	・リーダーが各チームの話し合い内容を、第二言語で、１分程度で要約する	４分
5	・各教員からコメント	４分
6	・司会が次回のコラボ授業の確認をして終了	１分
7	・フリーディスカッション	10 分

50 分であるため、90 分の合同授業は不可能であった。

合同授業では、回を重ねるにつれて学生同士のラポールが形成されていき、徐々に発言量も増えていった。第二言語ではあまり話せない学生も、母語では問題なく会話ができるため、終始無言で疎外感を味わうことはなかったように見受けられる。母語で話していても元々口数の少ない学生は数人いたが、ディスカッションには興味を持って耳を傾け楽しんでいる様子が伺えた。日本側は１講目であるにもかかわらず、うとうとする学生や欠席する学生もいなかった。このことは、武蔵の学生がアメリカの学生との交流を楽しみにしていたことの表れであると言えるであろう。

授業では学生がテーマに沿ったプレゼンテーションを行う（表２）。何を話すかは学生に委ねられる。武蔵生の場合、プレゼンテーションをする学生は、２人１組となり、テーマに関する情報収集、PPT と原稿の作成を行う。希望する学生は、ゼミ教員に原稿の添削と発音指導を受け

る。全ての学生が自主的に原稿と発音の指導を求めてきたことからも、学生が「真正性」の高い合同授業に、主体的に参加している様子が伺える。

ブレイクアウト・セッションでは、トータル16分のうち、8分を日本語（英語）のみで、残りの8分を英語（日本語）のみで話すというルールを設けた。しかし、教員が各ブレイクアウト・ルームを訪問したところ、優勢言語がより多く使われている傾向が観察された。多くの場合、武蔵生の英語力よりもUNCの学生の日本語力が優勢であった。双方が理解しやすい言語で話す方が「楽で手っ取り早い」というのが本音であろう。しかし、語学力を伸ばすためには、聞く側は理解できなければ自分でそのことを相手に伝え、言い換えてもらう依頼をするなどのストラテジーを身につける必要がある。また、話す側にもどう伝えれば理解されるのかを体得していくことが求められる。「相手の言うことが聞き取れない」、「自分の言うことが伝わらない」、という経験から、学生は自分に足りないものを認識し、試行錯誤をするようになっていく。バディ・システムのように教員の目が届かないときには、優勢言語で話す時間が長いであろう。そのため、合同授業では言語を混ぜないというルールを徹底させた。また、合同授業は可能な限り学生中心で行うことを重視したため、ブレイクアウト・ルームでの進行は双方の学生に任せて、教師は極力発言を控えた。

2回目の合同授業が終わったときに、武蔵の学生たちは、テーマに関する英語の語彙不足が英語で発言できない主要原因であることに気がついた。そのため、3回目以降に向けては、ゼミ生全員で手分けをしてテーマに関する語彙リストを作成し、それを用意して合同授業に臨んだ。それには一定の効果があっと、学生はアンケートで答えている（6.1参照）。

4.4　バディ・システム（Buddy System）

学生の学習機会を増やすために、授業外で少数の学生同士でディスカッションを行うバディ・システムを設定した。バディ・システムでは１グループ４人程度の固定されたメンバーで、授業時間外の自分たちが決めた時間に指定されたトピックについて話し合う。予習として、事前に共通の関連文献を読むことが義務づけられている（表３）。文献は日本語の場合と英語の場合がある。学生はバディ・システムで話し合った内容を第二言語でレポートにまとめ、バディの添削を受けてから提出する。日本人の学生は 300words 以上、アメリカの学生は 400 文字以上と指定した。

表３　Buddy System のトピックとレポート締切日

	予習文献の内容	レポート締切日
１回目	Family Life（英語）	10 月 15 日㈯
２回目	教育制度（日本語）	10 月 25 日㈫
３回目	Holidays（英語）	11 月 4 日㈮
４回目	世界が 100 人の村だったら（日本語）	11 月 15 日㈫
５回目	Parties, Dating and Romance（英語）	12 月 1 日㈭

学生はインスタグラムなどの SNS を通じて連絡を取り合い、自分たちで話す日時を決めた。そのプロセスも、第二言語を用いた「真正性」のある言語活動である。学生への聞き取りやアンケートの結果から、バディ・システムを楽しいと感じる学生が大変多いことがわかった（6.1 参照）。「話が盛り上がって２時間以上話した」「初めて外国人の友達ができた」などと、学生が楽しそうに話していた姿が印象的であった。

５．レポート例

バディと話した後は、その内容を第二言語でレポートにまとめ、バディ

の添削を受けた後、期限までに提出する。学生は10日から2週間程度でディスカッションを行い、レポートを書き、添削を受けるという忙しいスケジュールをこなした（表3）。本節では、日米それぞれ一点ずつ、学生が書いた添削前・後のレポートをとりあげ、紹介する。

5.1　アメリカ人学生による日本人学生の英語レポートの添削例

武蔵のある学生がFamilyというテーマで書いたレポートを、アメリカ人学生が添削した例を紹介する。添削内容は、日本語と英語の両言語で行われている。下線部1～4は、添削で指摘を受けた箇所（添削前の文章）を、下線部(1)～(4)はそれを書き換えた箇所（添削後の文章）を示す。

〈添削前〉

This time the theme was “family life.”

First, we discussed family. It seems that both Japan and the United States are similar in that the marriage rate is declining year by year. In the United States, people tend to get married after graduating from high school, but of course there are also people who get married later in life. [1] The United States has a higher divorce rate than Japan, it seems that there are few people our age have parents who live together without their parents getting divorced. After divorce, [2] there are various forms family life such as remarriage between children, single-parent families, and living together without a marriage license. In Japan, many people try to hide their parent’s divorce, but in the United States, they don’t hide it as a piece of information about themselves.

Next, we discussed the differences and similarities between Japanese and American hospitality. In Japan, there is a saying that "the customer is God," and in the United States there is a saying that means "the customer is always right." [3] In the United States unlike in Japan, there is no welcoming yell of welcome to the entire store, but it is the same to check the number of customers and show them to their seats. That's all for the theme.

Finally, we talked about each other's lives. In North Carolina, some years it snows a few times, and some years it only snows once. I was surprised to hear that because it snows a lot every year in Hokkaido. I am very interested in hearing that they sit in the back of trucks and drink beer before going to watch the university football game. In conclusion, I was able to learn a little about the differences and similarities [4] between Japan and the United States, and about North Carolina in this discussion. I want to know more about them, and I want to tell them about us. It was a good stimulus for me to study harder so that I could speak with confidence like them.

（下線部 1 に対するアメリカ人学生のコメント）

These need to be two separate sentences. "The United States has a higher divorce rate than Japan. (Additionally), it seems there are few people our age who live together without their parents getting divorced." Also, I'm not sure what you mean by the second sentence. "It seems that few Americans our age have parents who are not divorced" or "It seems that few Americans our age have parents who are still together" makes more sense here, if this is what you mean. If you were to use, "It seems

that there are few people our age who live together without their parents getting divorced" the meaning turns into「離婚して一緒に住んでいる同い年のアメリカ人があまりいないみたいです。」It gives the feeling that all American youth whose parents are divorced are living in the same place together.

文章二つに分けた方がいいです。"The United States has a higher divorce rate than Japan. (Additionally,) it seems there are few people our age who live together without their parents getting divorced" みたいにいいかもしれません。二番目の文章の意味はちょっと分かりにくいと思います。"It seems that few Americans our age have parents who are not divorced"「離婚していない同い年のアメリカ人があまりいないみたいです」それとも、"It seems that few Americans our age have parents who are still together"「まだ結婚している同い年のアメリカ人があまりいないみたいです」の方がわかりやすいです。"It seems that there are few people our age who live together without their parents getting divorced" 使ったら、「離婚して一緒に住んでいる同い年のアメリカ人があまりいないみたいです。」の意味に変わります。両親が離婚しているアメリカの若者達が全員同じ場所に住んでいるような雰囲気になります。

（下線部 2 に対するアメリカ人学生のコメント）

You can use the word "form" like this but you should provide some more context or else it sounds like a form you fill out (like a divorce form). For example, "After divorce, there are various forms of family life such as..." or "After divorce, there are various forms of families in America such as..." are much easier to understand.

「Form」の言葉はこのように使いますが、「Form」は違い意味もあり、コンテキストをあげないと、どちらの意味がわかりません。別の意味は、書類を記入することです。例えば、“After divorce, there are various forms of family life such as...”それとも、“After divorce, there are various forms of families in America such as...”は分かりやすくなります。

（下線部 3 に対するアメリカ人学生のコメント）

“In the United States, unlike in Japan, there is...”読点が必要です。

The construction and flow of the sentence makes it somewhat unnatural. “there is no welcoming yell of ‘Irasshaimase!’ to the entire store. However, in America, there is still an employee who asks about the number of customers and shows them to their seats” is much more natural.

この文章は文法的にちょっと不自然です。“there is no welcoming yell of ‘Irasshaimase!’ to the entire store. However, in America, there is still an employee who asks about the number of customers and shows them to their seats”の方がもっとナチュラルです。

（下線部 4 に対するアメリカ人学生のコメント）

読点が入らないです。“between Japan and the United States and North Carolina in this discussion”.「about」ってもう文章の前に言ったので、文章また言うのは必要じゃないです。

読点は必要ではないです。そして、「more」入れた方がいいと思います。このように、I want to know more about them and I want to tell them

more about us.

〈添削後〉

This time the theme was "family life." First, we discussed family. It seems that both Japan and the United States are similar in that the marriage rate is declining year by year. In the United States, people tend to get married after graduating from high school, but of course there are also people who get married later in life. The United States has a higher divorce rate than Japan. (1) It seems that few Americans our age have parents who are not divorced. After divorce, (2) there are various forms of family life such as remarriage between parents, single-parent families, and living together without a marriage license. In Japan, many people try to hide their parent's divorce, but in the United States, they don't hide it as a piece of information about themselves. Next, we discussed the differences and similarities between Japanese and American hospitality. In Japan, there is a saying that "the customer is God," and in the United States there is a saying that means "the customer is always right." (3) In the United States, unlike in Japan, there is no welcoming yell of "Irasshaimase" to the entire store. However, In America, there is still an employee who asks about the number of customers and show them to their seats. That's all for the theme. Finally, we talked about each other's lives. In North Carolina, some years it snows a few times, and some years it only snows once. I was surprised to hear that because it snows a lot every year in Hokkaido. I am very interested in hearing that they sit in the back of trucks and drink beer before going to watch the university football game. In conclusion, I was able to learn a little about the differences and similarities (4) between Japan and the United States and

North Carolina in this discussion. I want to know more about them and I want to tell them more about us. It was a good stimulus for me to study harder so that I could speak with confidence like them.

この添削では、日本人学生が書いた英文について、アメリカ人学生が、なぜわかりにくいのかを説明した後に、自然な英文例を示している。日本人学生は、添削のコメントを読むことで、自分の書いた文の改善点に気づき、よりわかりやすい英文をインプットすることができる。外国語習得研究においては、理解可能なレベルのインプットが効果的であるというインプット仮説（Krashen, 1982）や、アウトプットのほうが効果的であるというアウトプット仮説（Swain, 1995/2000/2005）、さらには言葉のやりとり（インタラクション）が重要だとするインタラクション仮説（Long, 1981）など、様々な仮説がある。どのメソッドがより効果的であるのかは別の研究に委ねるが、インプット、アウトプット、インタラクションのどれもが有効であることは、議論の余地がないであろう。バディ・システムとレポートの相互添削は、この3つの要素を全て満たしながら、学習時間を増加させている点で、一人で単語を暗記するような一要素に特化した単調な学習法よりも、効果が高いと推察される。

ネイティブ・スピーカーによる添削には、次のような利点が期待される。まず、第6節のアンケート結果に、「表現方法が学べる」「表現の幅が広がった」などの感想が書かれていたように、学生は「自然な英語表現」を学べることを利点と捉えていることがわかる。また、「安心感がある」「説得力が違う」など、ネイティブのコメントに対する信頼感が強いことが伺える。さらには、同年代の学生同士であるため、「軽い気持ちで書くことができる」「楽しかった」「嬉しかった」など、同年代であるがゆえに心理的ハードルが低く、楽しく学んでいる様子が伝わってくる。

5.2　アメリカ人学生の添削前と添削後のレポート例

つぎにアメリカ人学生が Holidays というテーマで書いた、添削前と添削後のレポートを紹介する。日本人学生は、「贈呈」を「贈る」としたほうがいいと助言するなど、より自然な日本語を提示している様子がうかがえる。

〈添削前〉

今週の話し合いで、日本とアメリカの祝日の違いについて色んなことを学びました。まず、両方の国でバレンタインデーは恋人と祝いますが、[1]どうやって祝うか違います。アメリカでは、デートをしたり、男性も女性もプレゼントを [2]贈呈したりしますが、日本では女性が男性に [2]贈呈して、バレンタインデーの一か月後のホワイトデーという日に男性が女性にプレゼントを [2]贈呈します。次はハロウィンです。アメリカの大学ではハロウィン前の週末 [3]は「ハロウィーケンド」といいます。その週末の間毎晩パーティーがあります。ハロウィーケンドが一番楽しい祝日と思う大学生が多いです。日本のハロウィンは 10 月 31 日だけです。クリスマスも違いがあります。日本人は友達や恋人とクリスマスを祝います [4]けど、ほとんどのアメリカ人はクリスマスの時 [5]家族だけといます。歴史的にクリスマスはキリスト教の祝日ですが、日本でもアメリカでも [6]クリスチャンじゃないクリスマスを祝う人がいっぱいるらしいですね。最後はお正月です。アメリカのお正月の祭りは 12 月 31 日の夜に [7]起こって、ニューヨークのタイムズスクウェアで新年を表すために「タイムボール」という球を落下させます。日本では、そういう行事がありませんが、12 月 31 日だけじゃなくて、数日でお正月を祝います。年賀状や大掃除、年越しそばなど、アメリカに比べると様々な習慣があります。

いつものように今週の話し合いがすごく面白かったです。来週も楽しみ

にしていますよ！

〈添削後〉

今週の話し合いで、日本とアメリカの祝日の違いについて [8]色んなことを学びました。まず、両方の国でバレンタインデーは恋人と祝いますが、[1]どうやって祝うかが違います。アメリカでは、デートをしたり、男性も女性もプレゼントを [2]贈ったりしますが、日本では女性が男性に[2]贈って、バレンタインデーの一か月後のホワイトデーという日に男性が女性にプレゼントを [2]贈ります。次はハロウィンです。アメリカの大学ではハロウィン前の週末 [3]を「ハロウィーンケンド」といいます。その週末の間毎晩パーティーがあります。ハロウィーンケンドが一番楽しい [9]祝日と思う大学生が多いです。日本のハロウィンは 10 月 31 日だけです。クリスマスも違いがあります。日本人は友達や恋人とクリスマスを祝います [4]が、ほとんどのアメリカ人はクリスマスの時 [5]家族と過ごします。歴史的にクリスマスはキリスト教の祝日ですが、日本でもアメリカでも [6]クリスチャンではなくてもクリスマスを祝う人がいっぱいいるらしいです [10]ね。最後はお正月です。アメリカのお正月の祭りは 12 月 31 日の夜に [7]行われ、ニューヨークのタイムズスクウェアで新年を表すために「タイムボール」という球を落下させます。日本では、そういう行事がありませんが、12 月 31 日だけじゃなくて、数日 [11]でお正月を祝います。年賀状や大掃除、年越しそばなど、アメリカに比べると様々な習慣があります。

いつものように今週の話し合いが [12]すごく面白かったです。来週も楽しみにしていますよ！

〈添削の理由〉

1．「違います」の前に「が」の助詞が必要。

2.「贈呈」give a present は日本語に訳すと「贈呈」でも正しいが、状況及び使い方が間違っている。
3.「は」ではなく「を」。助詞の間違え。
4.「けど」は話し言葉で、「が」は書き言葉。
5.「家族だけといます」は意味が分かりにくい。
6.「クリスチャンじゃないクリスマス」は意味がわかりにくい。
7.「起こる」は間違いではないが「行われる」の方がわかりやすい。

日本語教師の視点から添削前と添削後のレポートを比較すると、他にも指摘したい箇所があるため、参考までに挙げておく（以下の 8 ～12）。

8.「色んな」は話し言葉なので、「色々な」がふさわしい。
9.「祝日と」は間違えである。「祝日」は名詞なので、と思うの前に「だ」を入れて「祝日だ」が正しい。
10.「ね」を作文で使うのはふさわしくない。
11.「で」ではなく「間」。
12.「すごく」は話し言葉なので、「とても」がふさわしい。

6．アンケート結果

第 5 回目の合同授業を終えた後に、アンケート調査を実施した。質問項目は、担当教員で話し合い、一部日米共通の質問も設けた。本節では、学生の生の声が伝わるように、記述回答を中心にいくつかのアンケート結果を抜粋して紹介する（表 4 ）。また、日米のアンケート結果を比較し考察する。回答の文言は明らかな記述ミス以外は原文のままで、下線は筆者によるものである。

表 4　日本人学生 11 人に対するアンケート回答

Q1：合同授業はどうでしたか？

・全く良くなかった（0 人）　・あまり良くなかった（0 人）　・どちらでもない（0 人）　・良かった（3 人）　・とても良かった（8 人）

Q2：Q1 の理由を教えてください。

〈良かったと回答した 3 人の理由〉

・日本で実際にアメリカ人と話す機会がほとんどなく、アメリカと日本の違いなどがを学ぶことで、少しでも今後に生かすことができたと感じたから。
・外国人と話せる機会があり、とても楽しかったから。
・コロナウイルスの影響で留学などが制限されている中、こうして他国の学生と交流できて楽しい時間を過ごせたから。

〈とても良かったと回答した 8 人の理由〉

・海外の学生と実際に話す機会がなかなかないので、貴重な経験ができたから。
・普段アメリカの学生と交流する機会がなかったので、とても良い機会でした。
・アメリカの学生とたくさん話すことができたし、日本とアメリカの意見交換ができて楽しかったから。
・遠隔での交流は個人的に二回目だったのですが、初めは戸惑いや不安が大きく、レポートを書くのに二時間もかかっていました。しかし、事前の予習、プレゼン、レポートの添削を通して、レポートを書く時間が一時間、三十分とどんどん短くなっていき、自分の語学力の成長につながったと実感できたからです。
・年の近い海外の人と話せる機会はあまりないから。
・普段外国の大学生と話す機会がないので、意見を交換したり交流できたのが楽しかったから。
・アメリカの同年代の学生と話す機会がなかったのでとてもいい経験になった。
・zoom を通して普段なかなか接することのできない現地のアメリカ人とたくさんお話しできて楽しかったからです。

Q3：合同授業で良かったことはなんですか？（複数回答）

・英語の上達（8 人）　・英語を本当の交流で使えた（8 人）　・外国人と会話ができた（9 人）　・外国人の友達ができた（8 人）　・文化の違いがよくわかった（8 人）　・日本語も使うことができた（5 人）

Q4：Q3 以外で、あなたにとって良かったことを書いてください。

・アメリカの時間を確認することが増えた。
・視野が広がった、習慣や文化についての知識が身についた。
・アメリカの文化について知ることができた。
・視野が広がった。もっと海外に興味がわいた。
・相手が何を伝えたいのかを考えながら物事を聞くことができた。
・日本のことでも知らないことがたくさんあって、色々な発見に繋がったこと。
・ランダムに振り分けられるブレイクアウト・ルームは、いろんな人と交流できてよかったです。
・英語が伝わらない時でも焦らなくなったこと。また、ジェスチャーや表情がさらに豊かになったこと。

・もっと英語を話せるようになりたいという勉強のやる気が出たこと。
・知らないことを知ることができたこと。
・実際にアメリカの学生たちが英語で会話しているのを聞き、現地の会話のスピードを体感することができた。

Q5：アメリカ在住の同年代の大学生との会話は、日本在住のネイティブ英語教員との会話と比べて、学習効果や、わくわく感など、違いはありますか？　自分の言葉で、感じたことを書いて下さい。

・センシティブな話や生徒同士の疑問や悩みなどを互いに解決できたこと。
・同年代学生だからこそ、最近話題の話や、日本人の友達と同じような話ができて、自然と英語を話そう、勉強しようと思えました。アメリカの大学生側も同じように日本語を話そうとしていて、お互いが学びあえる環境だった。
・アメリカの大学生は native 英語教員よりも会話のスピードが速く、聞き取りずらかった。しかし、これが本物の native かとワクワク感がすごかった。
・自分たちにしか話せないぶっちゃけトークなど話し合いがとても盛り上がり、本当の友達のように時間も忘れて話続けていました。
・年齢が近いので話しやすかったし、わからないところも聞きやすい環境だった。その国の「今」を聞くことができるのでもっと学びたいと思った。
・ぐちゃぐちゃな英語でも理解しようとしてくれたり、うなずいてくれたりして、自信につながった。学生は先生と違って話すスピードが速く理解できない部分も多々あった。
・今はなされている若者言葉を知ることができたり、授業では習わない英語の使い方が学べる楽しさがあると思います。
・日本在住のネイティブの先生だと、そもそも生徒と先生の関係があるからフォーマルなことしか話せないけど、同年代となるとカジュアルに話せるのでわくわくします。
・アメリカ在住の大学生との会話の方が実際に使っている表現を知ることができるのでいいと思います。日本在住の教員だと日本語が通じて英語で頑張って伝えようとしなくなってしまうので、やはりアメリカ在住の人と会話をする方が学習効果は上がると思います。
・笑いのツボも学生ならではあり楽しかった。聞きたいこと話したいことを友達のようにしゃべりつつ勉強にもなるからとてもよかった。
・現地の大学生だと同じ年代ということもあり、質問をすることにあまり抵抗がなかったです。

Q6：レポートをパートナーに直してもらう経験は、writing の授業で教員に添削してもらう経験と比較してどうでしたか。学ぶ内容の違いや、モチベーションの違いなど、感じたことを書いて下さい。

・なぜ直されたのか、なぜ言葉が不十分なのかを適切にアドバイスをいただき、人によって添削のされ方が違うからとても面白いと感じた。
・お互いに話したことなので、「しっかりと書かないと」という意識が、教員に添削してもらう時よりありました。
・学ぶ内容は同じかもしれないが、モチベーションは現地のひとに直してもらっ

たほうが高かった。
・一般的な表現だけでなく、「私たちならこう表現する」という文を送ってくれるので、表現の幅が広がったと感じました。
・実際にネイティブの方に直してもらうので表現方法が学べる。バディなので自分のレポートに自信がなくても軽い気持ちで書くことができる。毎回やるたびに前回よりも添削個所を減らそうという気持ちになる。また添削後に必ず一言（good job!など）を添えてくれるのが嬉しかった。
・直しを送ってくれる際に感想やアドバイスを言ってもらえて嬉しかった。
・教員に添削してもらう機会が少なかったこともあり、ネイティブに直してもらうという安心感を得ることができました。
・説得力が違うと思いました。
・英語を学ぶなら海外の人に通じないと意味がないので、自分の書いた内容が通じているのか表現の仕方が正しいのかをパートナーに直してもらう方が勉強の効果があったなと思います。
・一対一なので細かい解説のやりとりをしているようでもいれて添削してくれた。同年代なので友人とメール楽しかった。そのため授業として行っている感覚はうすくモチベーションを保てた。
・より英語話者に伝わる英語になったような気持ちになりました？

6.1　日本人学生 11 人のアンケート結果と考察

表 4 は、日本人学生 11 人を対象に行ったアンケートへの回答である。アンケートは日本語で授業内に行われた。

Q1 と Q2 について考察する。まず 11 人全員が合同授業を「（とても）良かった」と回答した。特徴的なのは、その理由がかなり類似していることである。多くの学生が「外国人大学生と話す機会」（筆者による一重下線部）がこれまでなかったため、その機会を得て「楽しかった」（筆者による二重下線部）という趣旨の感想を述べている。

Q3 と Q4 でも、学生が交流できたことを喜んでいることや、英語力の向上を実感していることがわかる。それ以外で特徴的なのは、学生が外国の文化等について「知る」・「発見する」経験を実感していることである（筆者による一重下線部）。単に楽しいだけではなく、知識や視野が広がる経験から、学びを実感している様子が伺える。

Q5 の回答からは、学生は同年代の人との交流を好むという傾向が読

み取れる（筆者による一重下線部）。また、「今、実際に使われている言葉」に触れられることについても、複数の学生が言及していた（筆者による二重下線部）。

Q6 のライティングの添削に関する回答からは、学習の効果が高いと学生が感じている様子（筆者による一重下線部）のみならず、「嬉しかった」「楽しかった」「安心感を得た」（筆者による二重下線部）など、学生が前向きにライティング活動に取り組んでいる様子が伝わってくる。

アンケートでは、来年度に向けての改善点についても尋ねた。その結果、大きく分けて 3 点の要望が挙げられた。一つめは、「自己紹介やアイス･ブレイクにもっと多くの時間をかけるべきである」、という点である。今年度は、第 1 回目の授業で一人 1 分程度自己紹介をしただけであったので、バディ以外の接点のない学生とブレイクアウト・ルームでディスカッションをするときに、慣れるまでに時間がかかったという意見が複数出た。来年度は合同授業の回数を 1 回増やし（合計 5 回から 6 回に変更）、日米の学生同士がまずラポールを形成できるよう、オンラインで行えるアイス・ブレイクを取り入れたい。二つめは、「合同授業のトピックとバディ・システムのトピックを同じにして欲しい」、というものであった。短期間で十分に話せるだけの準備ができなかったため、トピックを同じにしてバディ・システムをリハーサルのように位置づければ、合同授業内でもう少し発言ができたかもしれない、という趣旨の意見が複数確認された。来年度への検討事項としたい。この要望に関連する別の要望として、「前期から合同授業を行いたい」または「前期にバディ・システムを行い、後期に合同授業をしたい」という意見もあった。第 4 節で説明したとおり、本年度は、後期に突然合同授業が始まった。そのため、ゼミ生たちは、泳ぐ練習をする機会がないまま荒海に投げ込まれたような状況であったと推察する。しかし、2022 年度板谷専門ゼミ生 11 人は、一人も欠けることなく見事にこの荒海を泳ぎ切り、自信をつけて誇らし

げに岸に戻ってきた。ゼミ生たちが口を揃えて「大変だった」と言っている通り、かなりの学習量であったことは疑いの余地がない。今年度のゼミ生を誇らしく思うとともに、来年度は前期からネイティブ・スピーカーとの Zoom 授業を取り入れ、後期に学生たちが存分に英語ディスカッションを楽しめる準備を整えたい。

6.2　アメリカ人学生 7 人のアンケート結果と考察

表 5 は、アメリカ人学生 7 人を対象に行ったアンケートへの回答である。アンケートは日本語で授業外で行われた。

Q1 と Q2 では、学生全員が合同授業に対して肯定的であり、繰り返しこのような授業を履修したいという意見があるのが印象的であった。しかしその反面、自由回答で「授業は面白かったものの時間を沢山とられたことがグレードに反映されていない」と不満を表明する学生もいた。この合同授業／バディ・システムの評価は、UNC では成績全体の 10% にしか値しないというのは、学生にとっては問題かもしれない。この点に関しては、来学期に検討する予定である。合同授業が楽しかった理由としては、やはり「同年代の人達と話すのはとても有意義だと感じた」ことが挙げられるであろう。大学では、日本人と話す機会はあるものの、教師が企画したイベントで話せる相手は、主に子供・主婦・社会人である。またそのようなイベントで知り合っても、その後交流があるかというと疑問である。その点、合同授業／バディ・システムでは、同じ人たちとまた会えるのが良かったと言える。

Q3 では、「ゴミ問題」というテーマに対して学生はあまり興味を示さなかった。日本と異なり、アメリカではごみ問題はまだ身近ではないからであろう。しかし、同時に学生は日本のごみの細かな分別回収を知って驚いていた。このように、合同授業は多文化に対する気づきを学生に与える機会になったと思われる。

表５　アメリカ人学生７人に対するアンケート回答

Q1：合同授業はどうでしたか？ とても良かった（６人）、良かった（１人）、どちらでもない（０人）、あまり良くなかった（０人）、ぜんぜんよくなかった（０人）
Q2：もし次の学期も合同授業があったら取りたいと思いますか？ 取りたいと思う（７人）、取りたくないと思う（０人）、どちらでもいい（０人） 〈良かったと回答した理由〉 ・自分と同じ歳の人と話すのが楽しかった。 ・日本人と話す機会があまりないので、合同授業がすごく有意義だった。
Q3：合同授業のトピックの中で一番良かったことに１、次に２、そして３、４、５、と番号を書いてください。 （人気の高かった順位）１位：大麻・ドラッグ　２位：同性婚　３位：女性の社会進出　４位：大学の紹介　５位：ごみ問題
Q4：あなたが合同授業で良かったことは何ですか？　当てはまること全部に丸をつけてください。 文化の違いがよくわかった（７人）、日本語が上手になった（６人）、日本人と会話ができる（６人）、日本人の友達ができた（５人）、英語も使うことができた（１人） 〈良かった例の回答〉 ・思ったより楽しくて本当の友達ができたと思う。 ・合同授業からたくさんのことを学んだと思う。
Q5：木曜日の夜７時／８時の授業はどうでしたか？ とてもよかった（３人）、良かった（２人）、あまりよくなかった（１人）、よくなかった（１人）、どちらでもない（０人） 〈良くなかった、あまり良くなかったと回答した理由〉 ・夜アルバイトをしていたため、そのアルバイトのシフトを合同授業の日は休まなければいけなかったのでよくなかった。 ・その時間ラボの実験が入っていたが、違う時間に移動させなければいけなかった。
Q6：合同授業で発表するのはどうでしたか？　当てはまること全部に丸をつけてください。 緊張した（５人）、準備が大変だった（１人）、日本語が上手になった（６人）、楽しかった（６人）、つまらなかった（０人） 〈発表の回答例〉 ・楽しかったけれど、やはり大きいズームで話すのは緊張した。
Q7：合同授業での語彙リストは役に立ちましたか？ とても役に立った（４人）、役に立った（３人）、あまり役に立たなかった（０人）、役に立たなかった（０人）、どちらでもない（０人） 〈役に立ったと回答した理由〉 ・語彙リストがあったので、自分の言いたいことが言えるようになった。

Q8：バディ・システムは良かったと思いますか？ とても良かった（6人）、良かった（1人）、あまり良くなかった（0人）、ぜんぜん良くなかった（0人）、どちらともいえない（0人） 〈とても良かったと回答した理由〉 ・これが自分の一番気に入っている部分だった。今学期、他のクラスと比べてもこれが一番だったと思う。 ・これが卒業前のクラスなので、この様な機会はない。楽しかったし、役に立ったと思う。 ・小さいグループで話すのは本当に良かった。
Q9：バディ・システムで良かったことは何ですか？　当てはまることに全部丸をつけてください。 日本人と会話ができる（7人）、文化の違いがよくわかった（7人）、日本語が上手になった（5人）、日本人とのメールのやりとり（5人）、日本人の友達ができた（5人）、先生がいないので自由に会話ができた（5人）、英語も使うことができた（0人） 〈良かったと回答した理由〉 ・一番学んだことは、違いについて学んだことだ。 ・先生がいないところで、自由に話せると心配する必要もないし、文法を間違っても大丈夫なのでこのシステムは素晴らしいと思う。 ・自由に話せたので、授業である感じがしないし、友達と会話している感じだった。
Q10：バディ・システムのレポートでしたが、パートナーに直してもらうのはどうでしたか？ とても良かった（5人）、良かった（1人）、あまり良くなかった（1人）、よくなかった（0人）、どちらでもない（0人）

Q4については、学生が文化の違いに気がついたことが良かった点である。また日本語が上達したと感じられるのも、ネイティブの日本人とのコミュニケーションができたことにより、ある程度の自信ができたように感じたのであろうと推測される。またコロナ禍で日本への留学を希望していたのに、叶わず卒業する学生がほとんどであったため、日本人との会話がこのような形で持てたことは大きな喜びであったようだ。

Q5の合同授業の時間であるが、これは今後も最も大きな課題になる。今回はたまたま全員が参加できたが、その時間帯にクラスが入ることも考えられるため、そのような学生に対しての対策を考えておく必要性を

痛感した。

Q6 で、7 人中 5 人が「緊張した」と回答したことは少し意外であった。楽しい反面学生は緊張しているという様子は、合同授業からは感じられなかったからだ。後付けの推察とはなるが、クラスで発言するのとは異なり、大勢の日本語母語話者の前で話すのは緊張するのかもしれない。しかしこのような場面でもしっかりと日本語でコミュニケーションをしてほしいと願っているため、日本人の前で発表するのは良い練習となった。

Q7 の語彙リストについては、合同授業の 3 回目から教師が学生に語彙リストを渡した。学生には事前にそのトピックについてどんなことを話したいのかを推測させて、わからない単語を英語で 15 個書かせ、それを教師が日本語に直して渡した。本来は学生に行わせたい作業であったが、学生の負担を考慮して教師が作成した。今後は時間が許せば、この語彙リストを使ってアメリカ人の学生同士で、事前に意見交換をさせてみたい。

Q8 と Q9 では、学生全員がこのバディ・システムを良かったと評価している。日本語で会話ができるというのも楽しみの一つだが、グループのバディを、これからも連絡しあえる友達として認識できたことも、国際交流としては意義があった。また教師がいないので自由に会話ができるというのも、やはり良かった点の一つだったのではないだろうか。教師がいるとどうしても評価されているという意識が湧いてくるが、教師不在だとそのようなことは考えずに、純粋に会話を楽しむことができるようだ。

Q10 の、バディに日本語を添削してもらうことについても、1 人を除き全員が肯定的だったのは、意外だったが嬉しい誤算であった。時々、日本語教育の専門家ではない日本語母語話者が添削をすると、学生が持っている能力以上に直すことがあり、大学では作文を日本人に直して

もらうのを禁止している。しかし今回は、添削後の作文を読む限り「添削のしすぎ」という傾向は見受けられなかった。

今後の改善案の一つとして、UNC ではこの合同授業／バディ・システムの評価を 30％程度にすることを検討する。当初、この合同授業を計画しているときには、学生がどのぐらい時間を合同授業に費やすのかが見えてこなかったが、今は概ね把握できたため、30％が適当だと考えている。授業の長さに関しては、Q1 と Q2 への回答から、学生が合同授業を楽しんでいることがわかったため、合同授業時間は 60 分から 90 分の間にすることを検討する。そうすれば、もう少しゆっくりとブレイクアウト・ルームで話すことができるであろう。また、バディ・グループを作る前に、その他の学生とも知り合う機会を設けることも、今後の合同授業に良い影響があるのではないだろうか。

6.3　日米のアンケート結果の比較考察

日米双方のアンケート結果から、どちらも 100％の学生がこの合同授業に関して肯定的であることが明らかとなった。合同授業を学生が有意義に感じるか否かということが、両教員にとって一番の懸念であったため、この結果は合同授業を手探りで企画・実施した両教員にとって大変嬉しい結果となった。また両大学とも学生は学習言語の上達を感じていた。学生たちが学習効果を実感できた要因として推測されるのは次の 2 点である。一つは、同年代で興味や感心に共通点が多く、自分から積極的に話したいと思う環境であること。もう一つは、自分を評価しない相手であることから、間違いを気にせずにコミュニケーションに集中できることである。さらには、学生たちはバディ・システムで、授業では行えないレベルの深い交流をしていたことがわかり、本合同授業が語学学習のみならず、異文化理解や多文化共生教育に寄与したことも、両教員の喜びとなった。

７．今後の展望

7.1　日本側の課題と今後に向けて

日本は４月が新学期であるのに対して、アメリカは４月に年度の授業が終わる。また、日米間には14時間程度の時差がある。そのため武蔵では、合同授業のときだけ専門ゼミの時間を午前９時に移動し、後期から合同授業を開始した。今後も合同授業を継続するためには、１講目に担当教員と２年生の授業が設定されない日が必要となる。この件に関しては、教務係に打診をして2023年度もそのような日を設けてもらえる予定である。このように合同授業は、大学全体の理解と支援がなければ成立しない。合同授業という試み対する大学からのサポートに深い感謝の念を表明したい。

アンケート結果からも伺えるように、学生は前期から合同授業を行うことを希望している。UNCには、武蔵の前期に授業がないため、来年度から前期は時差の少ないオーストラリアの学生と英語で交流することを予定している。筆者はオーストラリアの十数校の大学に、合同授業の提案をしたが、どこからも賛同を得ることはできなかった。しかし、武蔵の「令和５年度教育改革関連事業支援経費」の採択を受けることができたため、それを活用して、前期には後期の準備となるような活動を行えるよう、計画を進めている。

最後に、学生へのアンケート結果から、バディ・システムで使用された言語の大半が日本語であったということがわかった。合同授業においても、使用する言語を指定しない場面では、日本語でのやりとりが多く見られた。UNCの日本語授業では、教員が日本語のみで授業を行い、学生同士も日本語だけで会話をさせている徹底ぶりである。本ゼミナールでも、前期からオールイングリッシュで授業を行うとともに、外国の学生との遠隔授業の機会を設け、英語でコミュニケーションをとる時間を増やしていきたい。本年度の合同授業を通じて指導者として痛感したこ

とは、コミュニケーション・ストラテジーを徹底的に教える必要性である。相手が言うことがわからないときには、ただ沈黙してしまうのではなく、英語で「もう一度ゆっくり話してください」「別の言い方で言ってみてください」「ここまでは理解できたのですが、その先がわからなくなりました」「あなたが言っているのはこういうことで間違いないですか」「文字で書いて下さい」などと英語で言えるように、繰り返し指導していき、来年度は使用言語の割合が同程度になることを目指したい。

7.2　アメリカ側の課題と今後に向けて

UNC では、学生がそのクラスを取るか取らないかの決定に猶予期間が約 2 週間ある。実際には、理由があればクラスをいつでも辞めることができるし、出席に関しても厳しくない。そのような状況下で、今回のような授業で、学期が終わる 2 週間前にクラスを辞める学生が出た場合、バディ・システムの少人数グループで人数が減ってしまい、日本人の学生に迷惑をかけることになりかねない。また授業時間外に授業をする場合には、出席に関しての拘束力がないことから、離脱者が出た場合の対応策を講じる必要がある。

合同授業及びバディ・システムで取り上げるディスカッションのトピックに関しては、本年度のアンケート結果から、必ずしも学生の興味に合致していないものがあることがわかった。次年度に向けて、学生の意見を聞きながら、より学生が主体的に取り組めるトピックを検討していきたい。

8．まとめ

本合同授業は、北海道武蔵女子短期大学とノースカロライナ大学チャペルヒル校の双方にとって初めての試みであり、初年度は手探り状態が続いた。日本語と英語の発話率に差があることや、時差があるために双

方が本来の授業時間とは違う時間に合同授業を行わざるを得ない点など、様々な課題が見つかった。また、日本側は一教員の発案で個人的に行っている授業であるのに対し、アメリカ側は大学からの要請を受けて合同授業が正式に行われており、UNC はいち早く武蔵視察に教員を派遣し助成金を支出するなど、両大学での認知度にも違いが見られる。しかし、何よりも両教員の喜びとなったのは、学生から「楽しい」「嬉しい」という感想が聞かれ、Zoom で楽しそうに歓談する学生たちの姿であった。また両国の学生が英語力／日本語力の伸張を実感していたことも、大きな励みとなった。合同授業の改善と発展のためには、教員同士のコミュニケーションが何よりも大切である。今後も両教員がコミュニケーションを密にとりながら、力を合わせて課題を一つ一つ解決し、この合同授業をさらに良いものにしたいと決意を新たにし、本報告書の結びとする。

【謝辞】

2 人の教員を引き合わせてくださった、北海道武蔵女子短期大学町野和夫学長に、心からの謝意を表明いたします。また、札幌への視察出張費用を援助してくださった UNC、Carolina Asia Center と、この合同授業の 2023 年度カリキュラム開発費を予算化してくださった UNC、Office of the Vice Provost for Global Affairs の Collaborative Online International Learning 部門に感謝しております。

【参考文献】

Dörnyei, Z. (2009). The L2 motivational self system. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self*, 9–42. Bristol: Multilingual Matters.

Forest, J. (1998). University Teaching Internation: *Chapter 7 Encouraging the*

Use of Collaborative Learning in Higher Education: U.S.A.: Routledge
Krashen, S. D. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford, UK: Pergamon Press.
Long, M. H. (1981). Input, interaction, and second-language acquisition. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 379, 259–278.
Swain, M. (1995). Three Functions of output in second language learning. In G. Cook & B. Seidlhofer (Eds.), *Principle and practice in applied linguistics: Studies in honour of HG Widdowson,* 125–144. Oxford: Oxford University Press.
Swain, M. (2000). The output hypothesis and beyond: Mediating acquisition through collaborative dialogue. In j. Lantolf (Ed.), *Sociocultural theory and second language learning,* 97–114. Oxford, UK: Oxford University Press.
Swain, M. (2005). The output hypothesis: Theory and research. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of research in second language teaching and learning,* 1, 471–483.
Widdowson, H. G. (1978). *Teaching language as communication*. Oxford: Oxford University Press.
池上貴美子・喜多由香理（2007）「対人距離に関する　性・年齢・魅力・親密度の要因の検討」『金沢大学　教育学部紀要　教育科学編』，56，1–12
小林明（2011）「日本人留学生の海外留学阻害要因と今後の対策」『国際交流』２，1–17.【Online】https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/__icsFiles/afieldfile/2021/02/18/akirakobayashi.pdf（2022 年 12 月 23 日）
鈴木穣（2017）「語学留学は日本独特の留学形態である」を考察する―若者を取り巻く状況と今後の変化―『上武大学ビジネス情報学部紀要』16，39–62.
中村正史（2022）「対面授業再開も教室に来ない大学生たち「ポストコロナ」を示唆か」『朝日新聞教育ポータル』【Online】https://www.asahi.com/edua/article/14520959（2022 年 12 月 17 日）
「日航も新卒採用中止へ　来年度入社、国内大手２社見送り」朝日新聞朝刊，2020 年 7 月 21 日.